

新しい働き方を先取り 構造家・高見澤孝志

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ハシゴタカ

構造家の高見澤孝志さんの事務所名は「ハシゴタカ建築設計事務所」。このネーミングは、名字の漢字「高」から来ているようだ。「高」の字が「高」の異体字で、通称「ハシゴタカ」と呼んで区別するのに使う通称とか。それをストレートに社名にしたのがユニークだ。1977年に長野県南佐久平郡に生まれる。建築との縁は、母方の祖父が自営で建設業を営んでいたくらい。現場や作業場を遊び場にしてたのが、広い意味での建築に進むきっかけになったかもしれない。実は、今も佐久平市民で、自宅があり妻子が住む。子育ての環境にと生まれ故郷を選んだ。ウィークデーは単身東京で仕事に全力をあげ、週末は家族との生活。これは、新型コロナウイルス発生前からのスタイル。上野に近い入谷の事務所は、進行中のプロジェクトの模型でいっぱいらしい。近くに住まいを持ち、新しい働き方をすでに実践しているのです。

■中田捷夫研究室

東京理科大学理工学部では意匠設計志向だった。建築家・小嶋一浩さんからの授業が印象に残る。「それなのになぜ構造に？」覇志堂の質問に、「中田捷夫教授（当時）の特別講義を受けたのがきっかけ」。高見澤さんが構造の分野で生きていくことを決めただけに面白かったそうだ。構造で行くと決め、自由な雰囲気も気に入って中田研究室へ入る。就職は氷河期だったので中田先生の紹介でNCNへ。構造家の播繁さんの事務所へも出入りして勉強した

り、SE工法をマスターした。ところが、2年くらい経つとルーティンワークに飽きたりなくなってきた。義理堅く紹介者の中田先生に辞める意思を伝えたとこ、少し経って「事務所にポストが空くので入らないか？」と誘いの電話があった。そして、10年間を中田捷夫研究室に在籍することになる。入所してすぐに1万m²の戸田市立芦原小学校（設計／小泉アトリエ+C+A）の担当のひとりになったとは驚き。「本誌でも掲載した「開かれた学校」ですよ」と覇志堂。「中田捷夫さんはウエットな人柄、フラットな師弟関係でいてくれた。構造に対する考え方が明らかに変わった」と、感謝する高見澤さんなのでした。

■現場常駐

特に思い出深いのが、2012年にI.M.Peiが設計した、滋賀県のMIHO美学院中等教育学校の構造設計および監理。中田捷夫研究室が構造設計したMIHOチャペル、神慈秀明会カリヨン塔（1990年）、MIHO MUSEUM（1997年）に続いてであった。現場には「一生に一度出会えるかどうかの好機だった」。クオリティの高い建築のために、構造設計者を常駐させるプロジェクトだったのだ。車で40分の琵琶湖の湖畔に寝泊まりして、2万5千m²の敷地に点在するI.M.Pei設計の建物をつくるために1年間を過ごす。高齢なペイ自身とは数回お会いしたことが、今も高見澤さんの誇りなのです。

■梯子を登る

中田捷夫さんに影響されて取った国家資格の「技術士」。独立してみると、構造一級建築士・一級建築士にも増して生きて、技術コンサルタントなど仕事の幅が広がる。仕事の幅が広がる。RC造の設計や木造の設計にも詳しく、現場の経験から得た監理にも強い構造家だ。個性的な若い建築家と保育園や住宅など協働しながら、日本工学院の講師も13年間続けている。さらに、一段二段と活躍の梯子を登り続けている構造家なのです。

